●ふるさとへのエール

静は、戦時中の教師体験から、小さな学塾をつくろうと考え、郷里の友人井出一太郎、木内謙一らと諮って、デンマークの国民高等学校の例をも参照し、「地方文化の啓発・向上に資する機関たらしめん」と、浅間国民高等学校（別称・高原学舎）設立趣意書を印刷し、有志一八名からなる設立後援会も生まれた。

井出の岳父（がくふ）の好意で製糸会社とその宿舎の建物が提供され、一九四六（昭和21）年の入学式には、一〇〇人ほどの学生・生徒が参集した。彼らに大きな期待を抱かせたのは、教師席の田部重治（たなべじゅうじ）、片山敏彦、橋本福夫ら著名な学者たちの姿だった。が、翌年には学制改革で新入生がなく、高原学舎は一年半で閉校となった。

第１回佐久文化賞受賞式　1983（昭和58）年
前列左から若月俊一、井出一太郎、山室静、小林多津衛

それから三〇年後、静は「郷里の文化と人材育成のため、佐久地方で地道に創作や研究に従事している人たちを対象に若干の賞金を提供して、労に報いるため」と書いて、上述の井出と連名で佐久文化賞の設定を諮った。会員は二三名。毎年、佐久文化賞を贈って、静の没後は、山室静・佐久文化賞と改称。二五回重ねて二〇〇八（平成20）年に解散した。

この間も、静は県内の文学同人誌を通じて後進の指導につとめて、物心両面の尽力を惜しまなかった。度重なる市立図書館への蔵書の寄贈（山室文庫）。岩村田小学校と野沢中学校の校歌の作詞。一九七五（昭和50）年には、先の大戦下、学徒動員された野沢高女の生徒たちの手記『16歳の兵器工場』を編んだ。この回想記は〈戦争の証言シリーズ〉の一冊として、毎日出版文化賞特別賞を受けた。

かつて静は「信濃は私の故郷であり、他郷にあってもつねに心ひかれているふるさとであった」と書いたが、信濃における静の動静を支え共にしたのは、木内謙一、井出一太郎両氏であった。高原学舎、佐久文化会議は両氏なくしては成り立たなかっただろう。

●文学業績

山室静は文学者で、本人は詩人と呼ばれると本望らしい。一九六一（昭和36）年、ユトレヒトで開催された国際比較文学会出席のため、北欧など十カ国を歴訪の途次に求めて帰国後訳出した『ムーミン童話全集』（全九巻）は〈ブーム〉と呼ばれるほど話題になった。

『北欧文学の世界』、『アンデルセンの生涯』（毎日出版文化賞）、『評伝森鴎外』、『島崎藤村―生涯と言葉』、『シュワイツァー愛と思索の生涯』等々約一〇〇冊。翻訳書は約一五〇冊余り。生前（せいぜん）に、平林たい子賞（第一回）、川崎市文化賞、神奈川文化賞、先達詩人顕彰（けんしょう）状を贈られた。

山室静はムーミンシリーズや、アンデルセン童話など、多くの作品を翻訳した。
（写真の作品は全て講談社刊）

一九九四（平成6）年には、市民の厚意で岩村田の木もれ陽（こびび）広場に「故郷」の詩碑が建立されて、車いすながら元気で出席した。

（荒井武美）

・・・

佐久の先人たち⑮

アンデルセンやムーミンを日本に紹介した詩人

山室 静（やまむろ しずか）

（1906～2000年）

旧制野沢中学を卒業後、小学教員を経て上京。職を転々とした後、東北大美学科卒業。日本女子大教授を勤めながら、神話や昔ばなし等の研究を続け、北欧諸国の児童文学を紹介。ムーミン・シリーズを訳して「ムーミンを連れてきた人」と呼ばれる。

●影法師のように

山室静は、一九〇六（明治39）年に父の任地鳥取市で生まれた。父は長野師範と二松学舎を終えて各地の中学教諭を歴任。母は少女期に岩村田の英学塾に通い、長野県尋常女子師範を卒業後、断続的に小学教諭の職に就いていた。静は七人兄弟の四男。

一家は父が富山県魚津中学に赴任するに伴い（ともな）魚津に転居し、母が二学期から長野市の小学校に転任するため、小学一年生の静と弟妹は母と長野市に移る。翌年三月、父が仆（たお）れたと知らされて母は魚津へ駆けつけたが、父は程なく息を引き取った。

父の没後一週間ほどの間に、母は、四人の男児を、伯母たちの婚家にそれぞれ託し、三人の子供たちと母の生家へ引き揚げて志賀小学校に転勤した。静の預けられた家の伯母は、封建道徳と礼節を固守（こしゅ）して静に接した。

岩村田小学校二年から野沢中学校（現野沢北高校）一年までの養家の生活を、後に静は、「人の厄介にならず、厄介をかけず、人生の裏通りを影法師のように通り過ぎるのを望みとした」と回想している。

山室静少年時代

一方、静は、中学五年のときに着任した国語教師の和合恒男（わごうつねお）の印象を「まるで天窓を開かれたようにさわやかで清新なものだった」と書いている。和合との遭遇こそが、静をして、西行（さいぎょう）、芭蕉、良寛に親しみ、島崎藤村、西条八十（さいじょうやそ）、北原白秋に傾倒させて詩を書き始める動機になったのだろう。静は六冊もの詩集を遺したが、そこに収めた「少年詩篇」と名付けた詩の多くは、この期を含む一〇年ほどの作と打ち明けている。

「影法師のように」と書く侘（わ）びしかった少年期の体験は、生涯ついに静のこころから離れなかったのだろう。エッセイ集と詩集には昆虫や植物観察を好む孤独な少年の姿と呟きが繰り返し登場している。

●一七年ぶりの帰郷

上京後の静は、夜学や語学の講習会に通い、一九三三（昭和8）年、友人たちと『明治文学研究』『プロレタリア科学』『マルクス・レーニン主義芸術学研究』等の編集を手伝う。当時左翼文化団体はすべて弾圧されて機関誌の編集者だった静は、数度、勾留（こうりゅう）され、酷い拷問（ごうもん）を受けた。が、マルクス主義は、藤村や、小川未明や宮沢賢治の農民詩から学んだ、生の哲学に触発されたヒューマニズムを否定するものと考え、マルクス主義を放棄した。三〇歳で結婚してから、東北帝国大学法文学部（現東北大学文学部）美学科に入学。

やがて、仙台市にも空襲の危険が迫り、長女の小学入学が重なったため、家族を岩村田へ疎開させ、研究室に残っていた静も、一九四四（昭和19）年三月岩村田に帰り、野沢高等女学校（現野沢南高校）に就職するも、敗戦後に退職して、一家は小諸町の借家に転居した。